活動ピックアップ!

長岡地域 Nagaoka

次につなげたい、庶民の心の音色

桜毘会

新潟県の民謡をはじめ、津軽三味線の演奏や東北の民謡を主体にした発表活動を行っている団体です。地域のお祭やイベントに出演するほか、福祉施設への慰問などもしています。感染症禍の3年間はほとんど活動ができず、つらい日々でした。民謡は、伝えていく事が途切れると、忘れられ、消えてしまいます。今後は出前授業や演奏体験なども行い、若い世代の人達にその魅力を伝えていきたいです。

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS 長岡 みんなのSDGs

5 ジェンダー平等を実現しよう

性別に関係なく働ける会社を目指して

ミツワ興業株式会社

コンクリートを使って建物の基礎を造っている、1969年創業の建設会社です。体力が必要なことや、現場のトイレや更衣室などの環境が整っていないことから一般的に男性の多い建設現場ですが、現在当社では２名の女性社員が活躍中。女性社員が加わったことで、現場の雰囲気が明るくなったと実感しています。これからも女性社員にとってより働きやすい会社を目指して、スキルアップ制度の充実も進めていきたいです。

市民活動

虎の巻

研究テーマ

社会課題をリサーチするには?

より詳しく知りたい方はこちら!

NPOや市民活動を行う上で「どんな課題に向き合うか?」は、団体のミッションにも当たる重要なポイント。より本質的な活動をするには、様々な視点で情報を集める「リサーチ」が欠かせません。リサーチの際には、以下の3つのポイントを意識してみましょう。

01 世の中の状況を調べる（マクロな視点）

社会課題や地域課題は、私たちを取り巻く時代や社会情勢の変化の中で生まれています。ニュースや行政の政策、調査・研究などを参考にして、まずは世の中でどんな社会課題に向き合う動きが多いのか?といった社会トレンドをつかむことが大切です。

02 現場の声を聞く（ミクロな視点）

課題の現場には地域や場所・人ごとに特有の問題があり、また解決に活用できる資源が眠っています。「世間がこうだから」だけで動いてしまっては現実の課題解決にはつながりません。必ず、課題の現場の状況や、当事者の声をリサーチしましょう。

03 課題のセンターピンを決める

リサーチは、すればするほど多くの問題に気づきます。その中で、現場にとって最初に解決する課題は何か?優先順位をつけましょう。ボウリングのセンターピンのように、一つ倒せばドミノ式に他のピンを倒せるような「課題」に狙いを定めましょう。

センターからのお知らせ

＼好きな時間に好きな場所で視聴できる／

学びの場アーカイブ映像のご案内

市民活動のノウハウを学べる講座「学びの場」では、過去の講座のアーカイブ映像をご用意しています。お申込みいただいたメールアドレスに動画のURLが届くので、好きな時間に好きな場所でご覧いただけます。あなたの活動に、ぜひお役立てください。

おすすめ講座

活動を広くPRしたい方には…
メディアに取材されるには

団体内の会議の質をアップさせたい方には…
アイデアがあふれるワークショップのつくり方

ボランティアさんにどうお礼をしたらいいか悩んでいる方には…
ボランティアへの謝礼はどうする?

アーカイブ映像のお申込みはこちらから

発行

ながおか市民協働センター

〒940-0062
長岡市大手通1丁目4番地10
シティホールプラザアオーレ長岡 西棟3F
Tel . 0258-39-2020
Mail . contact@nagaokakyodo.net

知る、つながる 好きになる らこって
つながる ラジオ
市民活動のポータルサイト コライト

配布場所 長岡市役所及び各支所、サービスセンターの他、市内図書館、コミセン、子育ての駅等、公共施設に設置しています。

らこって Racotte

知る、つながる、好きになる
ながおか市民活動情報誌

2024
2
vol. 134

～新潟県中越大震災から20年～ 今ここから大切にしたいこと

特集
公益社団法人
中越防災安全推進機構
諸橋 和行さん
竹田元気づくり会議
砂川 祐次郎さん

NAGAOKA PLAYERS
森山 慎一郎さん

活動ピックアップ
桜毘会

長岡みんなのSDGs
ミツワ興業株式会社

ながおか市民協働センター

～新潟県中越大震災から20年～
今ここから大切にしたいこと

公益社団法人 中越防災安全推進機構
諸橋 和行さん

長岡市出身。中越地震の経験を活かし、地域の防災力を高めるために活動している「公益社団法人 中越防災安全推進機構」事務局長。震災当時は東京で働いていたが、2010年に長岡に戻り機構に勤務し、2021年より現職に就く。以後、「防災とは生き方である」を信念に、元々専門にしていた雪の研究も活かしながら活動中。

竹田元気づくり会議
砂川 祐次郎さん

集落の環境整備やイベント「竹田かんじきウォーク」の開催を行っている「竹田元気づくり会議」代表。1998年、埼玉県川口市から長岡市川口に移住。中越地震をきっかけに地域活動に深く関わるようになり、「ぼちぼちマイペース」をモットーに7世帯のためのフリーペーパー「ぼちぼちたけだ」など、自分にできる活動を長く続けている。

最大震度7を記録した「令和6年能登半島地震」から始まった2024年。おめでたいはずのお正月を襲った衝撃的な出来事は、多くの方に大きなショックと不安を与えました。実は、2024年は最大震度7を記録した「新潟県中越大震災（以下、中越地震）」から20年の節目の年でもあります。2014年の「復興」からの10年間は、どのような意味をもつ時間だったのでしょうか。また震災を経験した私たちは、何を大切にしながら未来をつくっていけばよいのでしょうか。公益社団法人 中越防災安全推進機構（以下、機構）・諸橋 和行さんと、竹田元気づくり会議・砂川祐次郎さんにお話を伺いました。

中越地震との関わり

ーまずは、中越地震とどのように関わったのか教えていただけますか。

諸橋 和行さん（以下、諸橋）：その頃、私は平日東京で働き、土日は長岡に戻って来るという生活をしていました。地震の起きた10月23日は土曜日だったため、長岡で被災。それまで防災との関わりはなかったのですが、大学の先輩から「雪の研究を活かして、自分たちにできることをしよう」と誘われ、現地調査や提言書の作成に参加しました。長岡に戻って来た2010年から機構で働くようになり、地域の防災活動に関わっています。

砂川 祐次郎さん（以下、砂川）：私は1998年に埼玉県から移住し、地震が起きた頃はガソリンスタンドで働いていました。被災後は、ガソリンスタンドに給油に来る人の対応をしたり、炊き出しを取りに行ったり。震災前も、塞の神や消防団などに参加はしていたのですが、今のように深く地域づくりに関わるようになったのは震災後からです。集落の総代や「竹田元気づくり会議」の代表になり、地域の復興に関わりました。

活動の分岐点となった10年

ー中越地震から10年後の2014年が「復興」だとしたら、その後の10年は、どのような意味をもつものだったと思いますか。

砂川：震災から始まった活動の一つの分岐点だったのではないかと思います。活動を続ける団体もいれば、力が抜けてやめる団体もいて。

中越地震を振り返る「新潟県中越大震災20年プロジェクト」のキックオフミーティングの様子。震源地だった川口と中越をつなぎ、砂川さんもパネリストとして参加した。

地域のキーマンが不在になって、続かなくなる活動もありましたね。

諸橋：地域復興支援員や中越メモリアル回廊に係るそれ以外の復興基金が廃止された影響もあるかもしれません。基金を資金源にしていた活動は続かなかったのではないでしょうか。機構としても、復興基金が出なくなった後の経営について考える10年でした。人件費を行政からの補助金に頼ってしまうと活動に制限が出てきてしまうので、スタッフの自主性や活動の自由度を担保できるような体制を整えてきました。

砂川：「予算があるから」ではなく、地域の人がやりたくてやっている活動は続いたのかもしれません。竹田元気づくり会議でも、メンバーそれぞれがやりたいことを自由にできる環境を大切にしています。

諸橋：メンバーの自主性や活動の自由度があるかどうかが、活動や団体の存続に影響したのかもしれませんね。

今ここから大切にしたいこと
目指すは、暮らす人の「ニヤニヤ」

ー10年後、長岡がどのようなまちになっているといいと思いますか。

砂川：暮らしている人が思わず「ニヤニヤ」してしまうような場所になっているといいと思います。私が住んでいる竹田集落では、外でご近所の人に会うと、みんなニヤニヤしているんです。「ニヤニヤ」は、何か面白いことが起きるんじゃないかというワクワク感の現れ。日々が楽しいことが大切だと思っています。

諸橋：「ニヤニヤ」はいいキーワードですね。それなら、私は防災が専門なので、「ニヤニヤの機会が増える防災」に取り組んでいきたいと思っていました。いきなり「避難訓練のために集まろう」と言っても、楽しくない。でも「バーベキューのために集まろう」と言えば、みんなニヤニヤしながら集まれるし、災害時に経験として活きてきます。

砂川：長岡市総ニヤニヤ計画ですね！

砂川さんが集落の人のために書いているフリーペーパー「ぼちぼちたけだ」。「何のためにやっているのかと聞かれたこともありますが、何になるかわからないから、面白い」と砂川さん。

大切なのは
「面白がるチカラ」と「想定外」

ー今お話いただいたようなまちにするために、大切なのはどのようなことでしょうか。

砂川：「面白がるチカラ」だと思います。地域の過疎化や高齢化が課題だと言われますが、それらは状況でしかないんです。一般的に課題と言われることや失敗も、どうやったら面白がれるか。色々なことを面白がって、みんながニヤニヤしてる方が楽しそうに見えて、自然と人が寄ってくるのではないでしょうか。

諸橋：「想定外」がキーワードだと思います。防災も想定通りにやろうとすると、言われたことや決めたことを、ただやるだけになってしまいます。でも誰かに任せてみると、想定外の動きをする。それで、失敗することもありますが、その過程の中で自主性が育まれます。その自主性がコミュニティを強くし、結果的に防災力が上がります。

災害は、いつだって想定外。そう考えると、活動の中で「想定外」を受け入れられる地域は「想定外」に強い地域と言えるのかもしれません。最初から目的地を決めてそこに固執するのではなく、面白いことを積み重ねて行った先にある未来にワクワクすること。今私たちが「課題」と呼んでいるものの中には、肩に入れていた力を抜いて、違う角度から見て面白がってみたら解決するものもあるのかもしれません。

中越防災安全推進機構では、中越大震災を振り返る「新潟県中越大震災20年プロジェクト」を実施中。中越大震災に関わった方たちが執筆し、毎日17時56分に配信されるメールマガジンなど様々な事業を展開しています。詳細は、QRよりプロジェクトのホームページをご覧ください。

NAGAOKA PLAYERS
ウワサのあの人にインタビュー！

森山 慎一郎 さん（37歳）

消防士／TR_Workers_NAGAOKA（ティーアール ワーカーズ ナガオカ）

1986年新潟市生まれ。消防士として勤務する傍ら、技術系災害ボランティア「TR_Workers_NAGAOKA」の代表として、長岡をはじめ日本各地で活動を行っている。

お互いさまの気持ちで 人と地域と未来をつなぐ

消防士1年目の頃、東日本大震災のボランティアに参加したことを契機に、各地の災害ボランティアに参加するようになったという森山慎一郎さん。職務で得た技能や知識を活かしたボランティアがしたいと考え、2022年1月「TR_Workers_NAGAOKA」を立ち上げました。ロープや重機、チェーンソーを扱う技術系災害ボランティアとして、高所での除雪や土砂・支障木の撤去、地震で被害を受けた屋根の補修などを行ってきました。

ボランティア活動をするうえで一番大切にしていることは、地域の方との対話であり、技術はあくまでも手段。「災害で失ったものや起きた出来事に対してはどうすることもできないですが、自分たちが寄り添うことで心の支えになり、次の生活に向けての不安を取り除くことができると思っています」。被災者の中にはボランティアに作業を頼みたくてもお願いできない人達がいるため、相手の目線に立って気軽に話せる関係づくりを意識して活動しているそう。「現地の方が笑顔になったり、ありがとうと言われると心が温かくなります。ありがとうと言われた分、ありがとうを言える人間でありたいです」。

被災者支援だけでなく、今後は将来の地域の安全につながる活動として、子どもたちに防災を身近に感じてもらいながら、楽しく学べる防災教育にも力を入れていきたいと考えています。2023年には小学校の授業の一環として、これまでの活動紹介と防災知識を伝える講演を実施。また、市内で行われたイベントでは重機や資材の展示、実際に重機に乗ることができる体験会を行いました。

「AI活用やDX化が進む世の中ですが、人に寄り添うことは人間にしかできないことだと思っています」と話す森山さん。当たり前のように「大丈夫ですか？」「困っていることはありませんか？」と声をかけて手が差し伸べられるお互いさまの気持ちがあふれるまちになることを願いながら、日々の活動を続けています。

2023年5月石川県奥能登地震で被害を受けた瓦屋根の補修作業。

2023年11月福島県いわき市豪雨災害現場での土砂撤去作業。

活動の根っこ

"お互いさま"で つながる!!

森山 慎一郎